

原稿記述の基本マナー —パラグラフの論理—

齋藤 正明

Saito Masaaki

はじめに

40年前の話である。「米国では大学初年次にレトリックを徹底的に訓練している。レポート提出が多いから、これは最初に必要。日本とは大きな違いだ」日本語チューターを勤めていた友人の話であった。その頃の私は論文投稿の度に、原稿文の作成に苦労していた。

レトリックとは何か—英文科出身の妻からは学生時代のテキスト、英文パラグラフの論理：ウィリアムス¹⁾を勧められた。初めてレトリックとは、パラグラフの論理のことだったと気づいた。米国では当たり前の内容だったかもしれないが、後に出版されたロングセラー、理科系の作文技術：木下是雄²⁾に引用されたものだった。

本稿は、筆者が得た30年前の情報の繰り返しでしかない。込み入った学術情報をいかに誤解無く、かつ平易に読者に伝えるか、という論理の記述スキル、手法である。今日では、わが国でもパラグラフの教育がなされているだろうと思いたいが、どのようなのであろうか。

論文誌で他人のピアレビュー、専門査読作業に関わるのは、正味数時間。理解しにくい文章では読む気も失せ、作業を後回しにしたくなる。投稿論文が通りにくい、掲載までの期間が長くなってしまいうのはパラグラフを基本にした文章構成に問題があるのかも知れない。

パラグラフの話題はWebサイト「小論文の書き方・レポートの書き方サイト」³⁾にも述べられている。ご一読を強く勧める。

1 表題と概要は最重要

文献情報について、多くの人が利用するインターネット検索。その限られた表示スペースで自由に目のできるのが表題と概要まで。有料になることが多いが、事実情報である図表データ、更に引用文献までがとりわけ重要である。和文であっても、図表の説明部は英文が好ましい。外国人にとっては図表、及び英文概要が頼りである。

2 表題と概要は本文から抜き出したもの

2.1 概要文は本文中から抜き出される

表題や概要は本文と別個に新規に作成されるものではない。表題の語句は概要中に必ず存在し、概要の文は本文中に必ず存在すべきものである。特許出願書⁴⁾を例にすると、特許権の本体である「請求項」と同じ文が、「詳細な説明」の中に存在する形式になっている。特許審査では、「詳細な説明」に記述された文章だけから「請求項」の補正が許されるのだ。

2.2 各パラグラフからトピックセンテンスを拾い集めたものが概要となる

概要は本文パラグラフのトピックセンテンス（主題文、第4節）を1つずつ抜き出し、筋道立つように並べ直したものである。次のステップで、並べ直した概要の構成に沿って、本文パラグラフの配置を入れ替える。すると、結果的に本文全体が理解しやすい構成となる。

以下に述べるように、本文パラグラフが基本に沿っていれば、表題、概要の作成は、悩むこともない形式的な作業である。同様に表題も重要なキーワー

ドを概要の中から抜き出して並べたに過ぎない。

3 パラグラフの基本

パラグラフの基本について述べる。最初の作業は、本文パラグラフ作りである。以降は形式的な作業ではない。パラグラフとは何か？パラグラフ＝段落、センテンス＝文と言い換えることができれば分かりやすいが、そのような意味付けに至っていない現況のようである。

3.1 パラグラフとは1つの内容の集まり

パラグラフとは、いくつかのセンテンスの集まりである。センテンスとは1つの文（ピリオド、句点までの文字列）のことである。何がS（Subject）＋どうしたV（Verb）のいくつかのセンテンスの集まりが1つのパラグラフである。パラグラフとは食事に例えれば、飲み込むまでの1口分である。情報を1口分ずつ逐次理解していくということである。

明瞭で理解しやすかったパラグラフの記述例として、1980年代に普及したAPPLE2 コンピュータマニュアル⁵⁾の印字イメージを図示する。空白行で区切られた集まりが1つのパラグラフである。

空白行で区切ったパラグラフ表示は、今日の情報系論文やWebサイトに見られるようになった。字下げ表示よりも区切りが明確で読みやすく、原稿作成も容易である。本誌のように掲載誌の体裁が、字下げ（1文字あけ）表記であるならば、清書段階で体裁を合わせればよい。

THE MAIN BOARD

The large green printed circuit board which takes up most of the bottom of the case is the computer itself. There are two slightly different models of the Apple II main board: the original (Revision 0) and the Revision 1 board. The slight differences between the two lie in the electronics on the board. These differences are discussed throughout this book. A summary of the differences appears in the section "Varieties of Apples" on page 25.

On this board there are about eighty integrated circuits and a handful of other components. In the center of the board, just in front of the eight gold-toothed edge connectors ("slots") at the rear of the board, is an integrated circuit larger than all others. This is the brain of your Apple. It is a Synertek/MOS Technology 6502 microprocessor. In the Apple, it runs at a rate of 1,023,000 machine cycles per second and can do over five hundred thousand addition or subtraction operations in one second. It has an addressing range of 65,536 eight-bit bytes. Its repertory includes 56 instructions with 13 addressing modes. This microprocessor and other versions of it are used in many computers systems, as well as other types of electronic equipment.

Just below the microprocessor are six sockets which may be filled with from one to six slightly smaller integrated circuits. These ICs are the Read-Only Memory (ROM) "chips" for the Apple. They contain programs for the Apple which are available the moment you turn on the power. Many programs are available in ROM, including the Apple System Monitor, the Apple Autostart Monitor, Apple Integer BASIC and Applesoft II BASIC, and the Apple Programmer's Aid #1 utility subroutine package. The number and contents of your Apple's ROMs depend upon which type of Apple you have, and the accessories you have purchased.

Right below the ROMs and the central mounting nut is an area marked by a white square on the board which encloses twenty-four sockets for integrated circuits. Some or all of these may be filled with ICs. These are the main Random Access Memory (RAM) "chips" for your Apple. An Apple can hold 4,096 to 49,152 bytes of RAM memory in these three rows of components.* Each row can hold eight ICs of either the 4K or 16K variety. A row must hold eight of the same

図1 APPLE2 マニュアルのパラグラフ記述

3.2 トピックセンテンスはパラグラフの要約文

パラグラフには、必ず1つだけのトピックセンテンスが存在する。トピックとは品詞として主語の類。業務文においては、「○○の件」の○○部分がトピックである。「何についての話か」であり、重要なキーワードを含むパラグラフの主題（論点、話題、論題）である。

トピックセンテンスとは、「○○がどうした」というパラグラフの要約センテンスである。パラグラフを貫く核心のセンテンスであり、主題についての確・簡潔な総括センテンスである。

4 トピックセンテンスのルール

4.1 ピックセンテンスとは

トピックセンテンスの身近な例は新聞の見出しである。読者に注目させる目的があり、字体も大きい。週刊誌の広告で「あの○○が熱愛」などがトピックセンテンスである。

トピックセンテンスには、次の3つの守るべきルールがある。そのルールに従えば、文章の構成が論理的で理解しやすくなる、結果として内容が明確になるというのだ。

4.2 トピックセンテンスは各パラグラフに1つ

ルール1：1つだけのトピックについてだけ述べる。2つ以上のトピックについて述べてはならない。トピックセンテンスに沿わないセンテンスは削除あるいは別のパラグラフに移動する。

ルール2：1度述べたトピックは他のパラグラフで繰り返さない。パラグラフが変わるということは、トピックが変わることを意味し、パラグラフが変わらないなら、トピックは同じままである。

ルール3：とりあえず、トピックセンテンスはそのパラグラフの先頭に置く。次のセンテンスから詳しい説明、具体例などを続ける。トピックセンテンスに集束するように記述・明言・主張するのが残りのセンテンスの役割である。

5 パラグラフ作成の具体的作業

5.1 1つのセンテンスは短く

簡条書き：センテンスを何がどうした (S+V) のバラバラの単文にする。複文、関係代名詞は避ける。重文、接続語も極力避ける (NG 例「しかし」)。内容が誤解なく伝われば、ぶつかり、ブッキラボウで結構。

削る：強調など形容修飾語を削る (NG 例「非常に」)。トピックに沿わないセンテンスは削除する。

再配列：類似したセンテンス同士を隣接させる。その結果、同内容が続くなら、いずれかは削除候補となる。繰り返しは極力避ける。

5.2 トピックセンテンスを探し出す

パラグラフの中からトピックセンテンスを特定する1つの手法である。とりあえず作成した1つのパラグラフの中からセンテンスを1つずつ削除してみる。どうしても削除できず最後まで残ったものがトピックセンテンスということになる。削除を繰り返すことによって、トピックセンテンスがどれなのか、明らかとなってくる。

5.3 削除済みセンテンスの復活

次に、トピックセンテンスの後に、削除センテンスを1つずつ復帰させてみる。トピックセンテンスの説明、解説、具体例、詳細、理由などである。ただし、トピックにそぐわないものは、戻さない。この段階でセンテンスの要、不要が整理される。

5.4 読者に親切な説明の追加

前述の作業によって不足していた情報、論理に気づきやすくなる。新たに追加することは重要である。必要な追加作業のために削除を繰り返してきたのである。

具体的な情報はもれなく：「微粒子→粒子直径 0.1-0.5mm」の例のように、事実を具体的に記述する。

より平易な単語へ改める：辞書引きが必要な単語、Google 検索の単語ヒット数が 10 万件以下の語句は

説明あるいは言い換えが必要であろう。

読者は理解できない箇所で思考を停止してしまう。報告書などは行政の法文系大卒レベルに理解できるようにすることが親切である。

狭い専門領域の記号や用語は本文の初出時に付記する。カンマ付けて説明をつける。あるいは説明文を追加する。説明文が長くなる場合は、脚注印 * + を付けて解説の節へ追いやる。解説は補足であるから、引用文献の節の後に記述する。不要と感じる読者は参照しなければ済むだけのことである。

5.5 事実と推測の明確化

時制表現による事実と推測、推理の明確化：
結果と考察では時制が異なる：事実と考察とは別のトピックであり、同じパラグラフでの混在は避ける。次に例を示すと、「 $1 + 1 = 2$ である。実測値は 1.8 であった。○○に起因して見かけ上小さく実測されたと考えられる」現在形 (真理)、過去形 (結果 = 過去の観察事実)、推量形 (考察 = 著者の推測) と時制も異なるが、1つのパラグラフに混在することで明確さを失うことになる。

結果節は具体的な事実であれば、専門審査も文句の付けようのないところ。できれば、「結果」節、「考察」節と明確に分離したい。「結果」節、「考察」節と明確に分離されていれば、信用性に関わる専門審査は随分とスムーズになる。

考察は事実から論理的に導いた著者による見解の1例でしかない。考察への評価、判定は後世も含めた読者自身が行うものである。数十年後、百年後に価値が見いだされた文献は数知れない。考察について、審査員の関与は微妙なところであろう。

6 今日から始めるメールの実践トレーニング

原稿文の作成に際して、パラグラフの論理を意識する重要性を述べてきた。実践トレーニングとして、日常的なメール作成の際に、パラグラフの心掛のススメである。筆者が日常的に多用しているのが、ワンメール = ワンパラグラフの自宅 - 職場間の自分のインターネットメールだ。

1つのパラグラフは携帯メールの1画面分：狭い画面を上下に動かさずに済む文の長さ、極力、視点

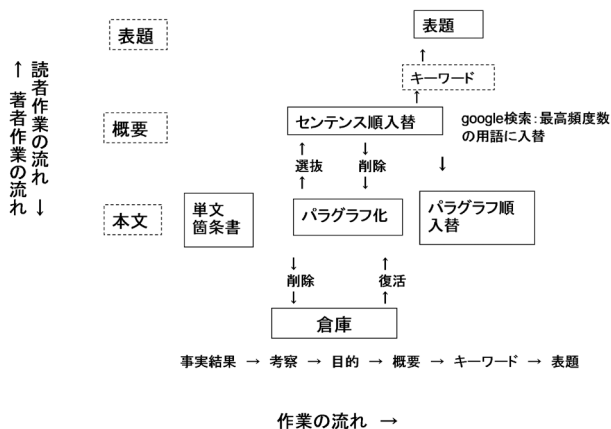


図2 文章作成の流れ

を動かさず一目で用件を完結させるということである。本の見開き分、あるいはパワーポイントの1スライド分といった感覚で捉える。

メール表題がトピックとなる:「こんにちは」「無題」などのメール件名は無意味である。1日に何十通ものメールに目を通す人にとっても表題だけで事足りるメールはありがたい。

このような自分宛のメールを整理していけば自ら原稿が出来上がる仕組み。件名を集めたものが概要になる。

あとがき

今日の社会の豊かさは弁証法を経た科学情報の積み重ねによって形成されてきた。客観審査を経た論文は社会の共有情報として重要である。

また、審査を経た論文は執筆者を専門家と見なす

物的証拠でもある。専門家とは最先端情報を有し創造的發展に寄与する、と期待される人物である。このために、研究と修養を継続している証として、絶え間ない論文掲載努力が不可欠ということである。

文章は情報を正確に伝える一方的なコミュニケーションである。読み手側に理解しやすくすることは情報共有の基本である。提供側の使命として、ボタンタッチされる読者側の視点は欠かすことができない。

研究の文章表現に費やす労力は並々ではないことは承知している。文の構成ができていれば、その労力も軽減される。読者側の視点に立つ専門審査、ピアレビュー作業も重要なポイントに絞って、スムーズに進められることになる。

参考文献

- 1) S.N. ウィリアムス, 英文パラグラフの論理, 研究社 (1973) (絶版)
- 2) 木下是雄, 理科系の作文技術, 中公新書 (1981)
- 3) 「小論文の書き方・レポートの書き方サイト」 <http://shouronbun.com/> (参照 2016-06-13)
- 4) JIS Z8301「規格票の様式」科学技術振興機構 http://jipsti.jst.go.jp/sist/handbook/sist08/sist08_s.htm (参照 2016-10-17)
- 5) C.Espinosa, *APPLE][REFERENCE MANUAL*, p.3, Apple Computer Inc. (1979)
- 6) 村上龍, eメールの達人になる, 集英社新書 (2001)
- 7) 「投稿の手引き」, 化学と教育, **59** (3), 174, 日本化学会 (2011), <http://edu.csj.jp/chemedu/kakyo.html> (参照 2016-10-6)
- 8) 科学技術情報流通技術基準, 科学技術振興機構 http://jipsti.jst.go.jp/sist/handbook/sist08_2010/sist08.htm#ST08_4 (参照 2016-10-17)